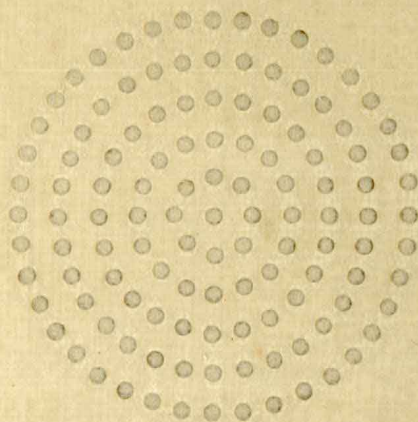
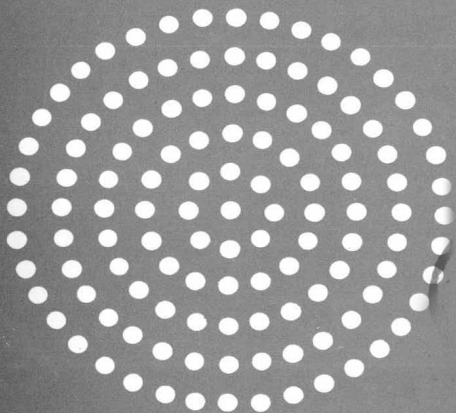




世界の詩集 5

シュトルム詩集



藤原 定訳

訳者 藤原 定

1905年福井県生まれ、1930年法政大学文学部卒業、現在法政大学教授。

著書 「文学における人間の生成」「ゲーテと世界精神」「日本近代詩」「萩原朔太郎」「愛のヘルマンとドロテア」「カロ



世界の詩集
5 シュトルム詩集

印刷カラー 暁美術印刷株式会社

本 文旭印刷株式会社

函・扉 暁美術印刷株式会社

製函 川合紙器加工所

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

昭和四十二年十一月十日 初版発行
昭和四十九年二月二十日 四版発行

訳者 藤原 定

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
●〇二 ●東京一九五二〇八
電話東京(三六)セ二三(大代表)

目次



十月のうた
 遠くで
 クリスマスのうた
 夏のまひる
 町
 海 辺
 森の中で
 エリーザベト
 夜のウグイス
 民謡ふう
 立琴ひきの少女のうた
 レギーネ
 みどりの木の葉
 ローゼ
 別れのとき
 今いちど
 夕ぐれ
 僕は感じる、人生がながれてゆくのを
 ヒヤシンス
 君はそうとは言わないが
 たそがれの時
 おんなの手
 やさしく君を呼んではみたが
 白いバラ

四 四 四 四 元 元 四 三 三 元 元 元 三 三 元 七 五 三 二 九 七

時はすぎ去り
 君はねむっている
 兄と妹
 異国の女
 月光
 ルーツィエ
 死んだひとに
 恋愛訓
 少女
 おお心地よいこの無為の時
 愛の腕に抱かれたことがある人は
 さあ ぼくにうちとけ
 ぼくの両方の眼を
 批評
 朝に
 夜に
 子供ら
 秋に
 死者たちに おお誠実であれ
 わるい時間に
 それがたいへんな苦しみであったにし
 ても
 幕合劇
 猫について

八 八

ごちそうさま	一八五〇年秋に	一三
エンゼル夫婦	海辺の墓	一六
大ためいき	一八五一年一月一日	二九
早朝に	エピソードひとつ	一三〇
湿地で	死神の合図	一三三
事務机で	別れ	一三七
あらしの夜	クリスマス・イヴ	一四〇
森の道	わが息子らに	一四三
春の夜	磔刑像	一四四
懷疑	ゼーゲベルクで	一四五
二月	君は今でもおぼえている？	一四八
三月	たしかに君であつたのだ	一五〇
四月	眠れずに	一五二
五月	庭の妖精	一五五
七月	インメン湖	一五九
八月	しもベルーブレヒト	一六〇
庭で	婚礼前夜の花嫁に	一六三
おいで	一枚のみどりの木の葉で	一六四
秋	花々	一六五
夜明け前	わが末っ子に	一六六
命名式に	貴族のお嬢さまがためいきをつき	一六七
モミの木蔭	死にのぞむ人	一六八
モルガーネ	セレナーデ	一七四
復活祭	格言	一七五

濃い影

終りのはじめ

みなし子

道にまよって

老人の格言

女性の三行詩

君の最愛のものを深く秘めよ！

うしなう

夜のささやき

荒野をゆくと

抒情詩形式

アグネス ブレッラーに

新しいヴァイオリンひきの歌

ミルテ

あかるい眼をしたその娘

セレナーデ

ナデシコ

解説

シュトルム・人と作品

鑑賞

年譜

乞食の恋

立琴ひきの少女

クリスマス・イヴ

四行詩

たそがれの時

さいごの宿り

間い

外国で

夜

秋の午後

言ってください そんなつよさが君に

はあると

コンスタンツェ

カモメとぼくの心

民謡ふう

ささげる詩

重病のとき

三五

二六

三八

三三

三三

三四

三六

三七

三九

三〇

三三

三四

三五

三六

三七

三八

四〇

二四

二五

二七

シュトルム詩集



十月のうた

霧たちのぼって 木の葉が降ってくる、
友よ、注^つごうよ！ おいしいブドウ酒、
この灰いろの日を ぼくらみんなで
金いろに おお、金いろにかがやかそうよ！

キリスト教的とか そうでないとか
世間はうるさくさわいでいるが
それでもこの世は びくともせず
まったくすてきな世界じゃないか！

時には泣けてくることがあると
グラスかちあわせ ひびかそう！
ぼくらは知っている まっすぐな人間ならば
けっしてほろびるものではないと。

霧たちのぼって 木の葉が降ってくる、
友よ、注^つごうよ！ おいしいブドウ酒、

この灰色の日を ぼくらみんなで

金いろに おお、金いろにかがやかそうよ！

ほんとに秋だね だが待ちたまえ、

ほんのしばらく 待ちたまえ！

春になったよ 空がわらい

世界はスマレに うもれているよ。

たのしい日々が はじまってきた

こういう時がすぎ去らぬ間に

元気な友らよ ぞんぶんに

たんのうしようよ たっぷりと！

遠くで

しずかなま昼だ 野原には
陽^ひがあたたかく 照^てっていて

古びたお墓のまわりには

バラいろの 光がほのかに流れてい、

野生の草花さきみだれ 立ちのぼってゆく

野のかおり 夏の青空のただ中へ。

木々のしげみのあいまをぬって こがね色の
よろいをつけたオサムシが いそぎすぎ去り
ミツバチたちは 枝から枝へと

エーデルハイデの 小鈴^{こすずり}にとまり、

草むらの中から かさこそ鳥があらわれ――
青空はヒバリの歌でみちみちて。

こわれかかったみすぼらしい家

ぼつんと一軒 陽ざしをうけて

ドアにもたれ 水のみ百姓

たのしそくに細目で見ている ミツバチを。

かれのむすこはその前の 石に腰かけ

アシをけずって 笛つくり。

遠くの方で 村の時計がひとつ打ったが

まひるのしずけさは さゆらぎもせず、

年よりの まつ毛がしだいにたれてゆき

夢みているのだ ハチミツのとりいれどきを。

——さわがしい時代のひびきも

このしずけさに まだ押しよせてはこなかった。

クリスマスのうた

天上から ひとつの星がやさしげに

ほほえみながら 深い谷間を見おろしており、

モミの林から たちのぼる香氣は

冬のそよ風をかぐわしくし、

たくさんのロウソクの灯で 夜はあかるくなってゆく。

きょうはたのしいクリスマス！

ぼくの心は うれしくおののき、

遠くから教会の 鐘の音がきこえ

心のふるさと はなやかで

しずかな 童話の国へさそわれてゆく。

ふたたび神秘的な けだかいものがぼくを支えるので

眼を見はり、立ちつくしつゝ ひそかに祈ると、

ぼくのまぶたの上に

金いろの 幼な子の夢がおりてきて
奇蹟がおきたのだとほくは感じる。



夏のまひる

庭や穀倉^{こくぐら}のあたりはひっそり
粉ひき小屋の中で 石うすがやすみ、
梨^{なし}の木は たくさん^なの葉をきらめかせつつ
陽に照らされて 身じろぎもせず。

ミツバチは ねむたそうにうなり
ひらいた納屋^{なや}の窓のなか
ほし草^なのにおいに酔^よって
灰いろの上着^{うわぎ}をきた 妖精^{えいせい}がうなずく。

粉屋^{こなや}も下男^{しもや}も高いびき、
起きてゐるのは 娘^{むすめ}さんだけ。
ふくみ笑^{わら}いして 用心^{しんじん}ぶかく
こっそりと 上靴^{じやうくつ}をぬぐ。

行つて粉ひきの若者を 彼女が起こしはしたものの
まだ眠たくて わからぬようす。

「ねえ、キスしてよ、あんたが好きなの、
でもそおーっとね、音たてないで！」